

特集

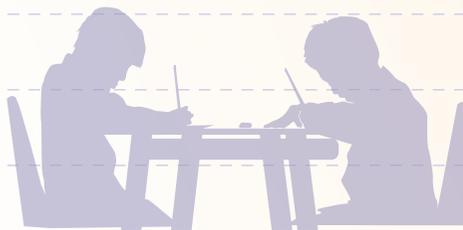
「小6 統一合判」6

中学入試レポート vol.

いよいよ迫った 2020 年入試。

**親子でここに
注意しよう！**

6年生のみなさんにとっては、今回のテストが首都圏模試の小6「統一合判」模試の最終回となった。2020年入試が火蓋を切る1月初旬まで、いよいよ残り約1ヶ月。まさに入試直前の時期を迎えたわけだ。今後、親子で体調に十分気をつけながら、ベストの状態の入試本番に挑めるように上手にリズムを作っていくしてほしい。今回はそのためのアドバイスと、保護者の心構え、注意すべき点などをお伝えしよう。



首都圏模試センター

お子さんの努力と成長の証を、 親子で確かめられる受験体験を！

来るべき2020年入試に向けて行われてきた小6「統一合判」模試。今年度も多くの受験生が、このテストにチャレンジしてくれた。そこで毎回の問題と真剣に向き合い、それぞれの志望校に向けた合格の可能性と課題を探ってきた、その延長に来春入試での合格が待っている。そう考えて、これまでの歩みを自信にしてほしいと思う。

この時期、保護者に残された重要な仕事はたった二つ。ひとつは入試までに必要なことの準備・スケジュール立てを万全にすることと、お子さんの体調管理。そしてもうひとつは、わが子にとってベストの併願作戦を考えてあげることだ。

4月から計6回にわたって行われてきた小6統一合判も、いよいよ今回で最終回。その結果はともかく、実際の合格の可能性は、最後までがんばり抜く受験生本人の強い気持ちと、それをサポートする保護者の熱意にかかっている。

その意味でも、今回の成績に関わらず、すべての受験生に、最後の最後まで「自信を持って」勉強を続けていってほしいと思う。12月に入り、急

に冬の寒さが感じられるようになったこの頃だが、勝負を決めるのは、まさにこれから入試本番まで1ヶ月あまりの取り組み方。その間の残された時間を生かし、粘り強くがんばり抜く意思と努力なのだ。

この時期、もう「第1志望校は動かさない」ということは本レポートでも度々強調してきた。これまで、親子で話し合い、少しずつ手応えを確かめながら考え抜いて決めた目標校ならば、もう何があっても迷う必要などない。

そしてこの時期だからこそ、いま一度、わが子に「中学受験をさせてみよう」と決意したときから今日までの、親子の歩みを振り返ってみてほしい。数々の苦労もあったことと思うが、それでも今日、この時期まで、それぞれの目標に向けて親子で一緒にがんばってきたことの意義と、これまでのお子さんの成長を、あらためて実感できるのではないだろうか。

もちろん目標は、あくまでも「第1志望校への合格」であることに変わりはない。しかし、中学入試に挑む最大の価値は、むしろこれまで努力してきた過程そのものと、そこで得ることのできた目に見えないさまざまな力や、お子さま自身の達成感、成功体験、あるいは貴重な失敗体験のなかにある。そうしたお子さまの成長の証を親子で実感できるような、ベストの受験をぜひ実現していただきたいのだ。

入試本番の朝、受験生の集場所にお子さんを送り出し、やがて試験会場となる校舎へ吸い込まれていく受験生一人ひとりの後ろ姿を見送る保護者の姿は、毎年、私たちの胸を熱くす

毎年2月1日に行われる開成中の2019年入試風景。大勢のマスコミが取材に訪れる。



毎年2月1日に行われる開成中の2019年入試風景。大勢のマスコミが取材に訪れる。



る。祈るような思いでお子さんの背を見守る眼差しには、今日までの成長を頼もしく実感する親としての思いも込められているはずだ。

このときまで親と子の二人三脚でがんばってきて、そんなふうにはわが子を入試本番に送り出すことになるすべての保護者の皆さんには、決して後悔はしてほしくない。どのような結果になろうとも、入試本番までに「やるべきことはすべてやった」という、吹っ切れた気持ちで、入試という“晴れの舞台”に、お子さんを気持ちよく送り出してあげていただきたいのだ。

そのためにも、あらゆる状況を想定してなお、最終的に実りある中学受験体験をわが子にさせられるような万全の併願作戦を立てることが、残り1ヶ月の間の、保護者の最も大事な仕事と考えて過ごしていただくと良いだろう。

小学生の力は入試直前まで伸びる。 わが子の可能性を信じよう！

この時期まで来ると、もう残された時間は決して多くはない。しかし、小学生の学力は「入試前日まで伸びる！」といわれるように、まだ追い込みは十分可能だ。とくに第1志望校に向けた本人の思いが強ければ強いほど、ラストスパートには

力が入るし、その効果もあがる。

中学入試は、まだ将来への大きな可能性を秘めた12歳の少年・少女が挑む、たった一度きりの貴重なチャンス。だからこそ、「わが子の可能性を信じて」、親子で力強く目標へ向かっていってほしいのだ。

首都圏中学入試に挑む受験生の総数は、今春2019年入試でも、5年続きで増加に向かった。公立中高一貫校の受検者も含めれば実質的には相当な大規模になっていることに変わりはない。したがって来春2020年でも、人気校のなかには目立って厳しさを増す入試も出てくるはずだ。

しかし、その一方で、受験できる学校（学校数）と入試機会（入試回数）は全体に増えているし、入試の形態も多様化している。将来が期待できる新設校や成長著しい新進の私学も増えている。それだけ選択肢は拡大しているのだ。

そうしたなかで、変化する状況をうまく活かして、上手な受け方をさせてあげることができれば、事前の模試の合格判定では安全圏に達していなかったチャレンジ校にも、最後のひとがんばりで合格できる可能性は、数年前の首都圏入試よりも格段に高くなっている。

併願作戦とは、以前は「万が一、結果が思うようにいかなかったときに備える」ためのものであった。しかし、現在の中学入試における「最良の併願作戦」とは、むしろ「第1志望校に“合格”していくために、あらゆるステップ（＝踏み台）を用意してあげる」ためのものという意味合いが大きくなっている。

最近では受験することがほぼ“常識”のようにになっている「午後入試」などは、その象徴的な存在だ。「午後入試を第1志望として受ける」受験生はほとんどいない。ほぼすべての受験生と保護者が、「わが子の第1志望校合格」のためのステッ

毎年2月1日に行われる桜蔭中の2019年入試風景。気迫のある表情で訪れる受験生が多い。



2020年入試「併願作戦」最終点検！ 6～8校を選ぶチェックポイント

～“チャレンジ校”と“押さえ校”の両方を、親の判断で的確に選択しよう～

●第1志望校(＝“チャレンジ校”でかまわない！)

親子で話し合い、考え抜いて決めた「第1志望校」ならば、まだ現時点では「合格可能性80%」に届いていない“チャレンジ校”であってもかまわない。もともと中学入試は、誰にも遠慮をすることなく、親と子の希望しだいで「受けたい学校を思い切り受けられる」ことが魅力のひとつだからだ。

もうこの時期まできたら迷う必要などない。ただ、チャレンジする以上は、「本気で受かる」つもりで、残り1ヶ月のラスト・スパートに全力を傾けよう。過去問題への取り組みも、常に真剣勝負のつもりで行おう。

●第2～第4志望校(＝“実力相当校”を軸に選択)

当然のことながら、併願作戦の軸は、これまでの「統一合判」で高い合格可能性が示された、いわゆる“実力相当校”でありたい。こうした学校(入試機会)をどれだけしっかり選べるかが、実り多い合格のための最大のポイントになる。

その併願校のなかには、やや“チャレンジ”気味の選択や、逆に慎重に“押さえ”気味の選択があったほうがよい。この組み合わせは、お子さんの性格や学力のタイプ、出題傾向、保護者の考え方などに合わせて、柔軟に考えるべきだろう。微妙なところでは、塾の先生のアドバイスを参考にしたい。

●第5、第6志望校(＝“押さえ校”を選んでおく)

実際に出願する6校(6～8校)のなかには、必ずこの“押さえ校”を入れておきたい。どんなに力の



2018年入試から新設された宝仙学園理数インテイクタイプ「理数インテイク型」の新人入試「理数インテイク型」(写真は2019年入試)

ある受験生といえども、まだ12歳の小学生。体調を崩したような場合のことも考えて、多少コンディションが悪くとも「受かる可能性が高い」学校を、最低ひとつは出願しておくべきだ。

そして、この“押さえ校”の選択は、あくまで親の責任で行うこと。子どもの意思や「好き嫌い」を理由にする前に、あらためて公立中高との比較という視点に立ち戻って、万全の体制を組んであげべきだ。こうした慎重な選択が、いざ本番のときに親子にとっての安心材料になり、第1志望校に「恐れることなく」思い切り挑んでいけたケースが実際に非常に多いということを意識してほしいのだ。

来春2020年入試でも、悪天候や交通機関の乱れなど、不測の事態が発生することがないとは限らない。もし何か起きた場合でも、「受験できる機会をフルに生かす」併願作戦を組んでおくことで、慌てずに対処することができるはずだ。

最後まで「受け抜いた」親子には、必ずや“勝利の女神”が微笑む！

わが子を確実に中学入試に“合格”させるための3つの基本原則は、これまでも何度かこのレポートでもお伝えしてきた。それは、①できるだけ多くの学校を受ける、②幅広い難度の学校を受ける、③明るく最後まで受け続ける、ということだ。

①の「数多く受ける」は、これまで毎年の受験

プとして、この午後入試という機会を併願に組み込んでいるのだ。

親が「これでやるべきことはすべてやった。あとはわが子が力を出し切ってくれることを祈るだけ」と思えるところまで念には念を入れて準備をし、最終的に親子でそういう心境になれたなら、もう中学受験は9割方“成功した”といってもいい。このレポートの最後に強調しておきたかったのは、まさにこの点なのだ。



これからが“合格力”をつけるとき。可能性を信じて、本気でラスト・スパートを！

～過去問対策と基礎力チェックで「基本」と「応用」の両立を！～

12月を迎え、いよいよ受験生の表情にも「入試直前」の緊張感が感じられるようになったこの時期。6年生は第1志望校に向けて、どの塾、どのご家庭でも、ラストスパートの真っ最中だろう。これまで2～3年をかけて培ってきた学力を土台に、入試本番で点を取れる「合格力」を身につけるために、個々の受験生は、それぞれの課題を見出していることと思う。

その課題を、残された時間（30～60日）で消化していかななくてはならないが、結局のところ、この「入試直前1ヶ月～1ヶ月半」の時期にやるべきことは、以下の2点に尽きる。常にその点を意識して課題に取り組んでほしいと思う。

●極端な「基礎基本」と実戦的な「応用」の力を！

この時期まで来れば、どの受験生も、中学受験に必要なひと通りの範囲は学習してきたはず。そして迎えた、この追い込みの時期にやるべきことは、①志望校の過去問題（そのほかの入試問題）演習に徹底して取り組み、実戦に即した「応用力」「思考力」「表現力」を身につけること、②これまで学習してきたなかで、実戦に欠かせない「基礎・基本」の部分を見直し、それを確実に身につけること、の二つに集約できる。

そういう意味で、極端な「基礎基本」の力と、実践的な「応用」の力を両立させる時期になったわけだ。矛盾するような課題ではあるが、これは入試を突破するために必ず要求される力だけに、常に意識して今後の課題に取り組んでほしい。

●過去問題（入試問題）対策

志望校の「過去問対策」については、本レポートでも何度かアドバイスをお伝えしてきた。今後年末から1月にかけては、塾でも自分自身（家庭）でも、主にこの課題に取り組むことになる。

なかには、まだこの時期でも「歯が立たない」問題や、解法の糸口がすぐには見つけられない問題もあるかもしれない。しかし、それでも一向にかまわない。「できない」ことや「覚えていない」ことを恐れずに、まず



2019年入試でも6千2百人近い志願者を集めて最大規模の入試となった1月10日の栄東A日程（写真は2018年入試）。

目の前の問題に正面から向き合い、限られた時間でその問題に真剣に取り組むことができればよい。そして見直したときに、ひとつずつ疑問を解決し、課題を消化していけばよいのである。

そういう経験を重ねていくうちに、「今日はできなかった」問題が、必ず「明日（＝入試本番）にはできるようになる」と信じて、この追い込みの時期を過ごすしてほしいのだ。

●「基礎基本」の再確認とマスター

そして、そういう入試問題（志望校の過去問題）対策の一方で、ところどころ「基礎基本」に立ち返り、これまでに学んできた基礎知識や公式、原理・原則を再確認してほしい。また、そうする必要が出てくるはずだ。そのときには、決して慌てずに、やはり一つひとつ見直しをしたうえで、この最後の機会に確実に身につけることを心がけてほしい。

進学塾や出版社の編纂した「基礎知識」マスターのための参考書を使った学習も、最も効果があがるのは、まさにこの入試直前の時期だ。もしこうした「基礎・基本」部分で不安を感じたら、これまで使い慣れた参考書やテキストを再度見直しするとよい。そこで正確な知識とともに、「よし、これはOK」という自信を身につけることができれば、「合格」へ一歩近づいたと考えよう。

生と保護者が実践し、体験してきたことだ。こういう知恵は、まぎれもなく数多くの成功と失敗の体験から導き出されたもの。こうした「先輩の知恵と経験」に学ばない手はない。

②の「幅広い難度の学校を受ける」は、果敢なチャレンジの一方で、入試当日にコンディションを崩したときでも「確実に受かりそうな」学校を、必ずひとつは選んでおくということだ。

いざ、2020年入試。入試直前～前日はこうして過ごそう。

～いつもどおりの生活リズムと、余裕を持った事前準備を心がけよう～

入試直前の1ヶ月は、願書提出の準備や、風邪の予防を含めたお子さんの体調管理まで、とくにお母さんは大変忙しく、気をつかう時期。この間の生活リズムをどのように整えていけばよいのか、ここで簡単なアドバイスをお伝えしておこう。

●入試直前1ヶ月

この12月から来年2月にかけて、いよいよ入試本番が迫ってくる。まず保護者にとっては、出願に必要な提出書類を準備する仕事が大変になる。

受験校（併願校）を決めたら、そのすべての学校の「入学願書」一式を入手して整え、貼付する写真の撮影や、願書の記入、健康診断、予防接種、受験校によっては小学校の先生への調査書記入の依頼など、具体的な準備に取り組む必要がある。

いまでは調査書の提出を求める学校は少なくなったが、もし必要な場合には、できる限り冬休み前に担任の先生にまとめて依頼すること。また願書もなるべく年内に記入を終えておきたい。万が一書き損じがあっても、年明けにすぐ再び手配できれば、慌てることが少ないからだ。

生活リズムはできるだけ、これまでどおりに。ただし、入試の時間帯に合わせて少しずつ朝型の生活リズムへ移行することも必要だ。しかし、これもふつうは1週間で切り替えが可能。どうしても朝型が馴染まないタイプのお子さんならば、ムリして変える必要はない。

●入試直前1週間

親子とも、必要以上にナーブになりがちな時期だが、できる限り、ふだんどおりの生活を心がけよう。お子さんのメンタルケアとストレス発散のためには、特別なことをするよりも、ふだんどおり学校へ行かせ、塾にも行かせるほうがよい。

保護者の仕事としては、綿密な受験スケジュール表を作成し、受験結果がわかったあとの（納入金や書類などの）段取りを再確認し、必要であれば、ご家族の間でしっかりと受験に関わる役割分担をしておきたい。できれば試験会



入試直前の時期にも、できるだけ「ふだんどおりの」生活をする中で、お子さんはストレスを発散できるように考えておこう（写真は模試の風景）。

場の下見や、交通機関、所要時間、必要な持ち物の確認を、もう一度しておけば安心だ。

●入試前日

ここまできたら、もう勉強はほどほどに切り上げて、むしろ家族でリラックスして過ごすことを心がけよう。食事も特別なものではなく、ふだんどおりのメニューから、お子さんの好きなもの、それでいて消化のよいものを選ぶとよい。

持ち物の準備とチェックは念入りに。何より受験票、筆記用具は大切だ。服装も、特に面接で気を使う必要がある（特別な）学校以外は、着慣れた普段着でかまわない。試験会場（教室）によっては、自分で体温調節が必要になることもあるので、なるべくなら前開きのカーディガンや上着など、着脱の容易なものを選んであげよう。

天候によっては、靴下の替えなどの用意もしておきたい（試験場に着いてから手を暖めるためのカイロや、保護者が控え室で待つときの膝掛け、受験生の荷物を預かる場合などに便利な大きめの袋なども用意しておく役に立つ）。

夜は十分な睡眠をとるのがベストだが、眠れないようなら、ムリして早く眠ろうと考えなくてもいい。極論すれば、一睡もできなくても入試問題は解ける。それくらいに考えておけば、かえってリラックスできるはずだ。

そして③の「明るく受け続ける」は、保護者の心構えと覚悟の問題だ。前もって「受けていこう」と決めていた学校は、途中で何があっても、最後まで明るく、粘り強く「受け続ける」姿勢が、成功へのカギになるということだ。

中学入試が、各学校への入学者を“選抜する”ためのものである以上、合格と不合格という結果は、否応なく受験生と保護者につきつけられる。しかし、それは決して受験生にとってのゴールではなく、次の成長へのステップとすべきもの。し



間違いのない「願書記入」と「出願書類」提出のための4つの心得！

～受験する学校すべてについて出願書類は早めに揃え、準備を整えておこう～

①願書は下書きをしてから正しく記入しよう

書き損じの跡の残る願書を、そのまま提出してしまうようなことはできれば避けたい。事前に用紙のコピーをとって下書きをし、それをていねいに書き写して清書すれば間違いは少なくなる。

志望理由の欄などは意外に記入の手間がかかるが、十分に考えをまとめて、簡潔に表現したい。文面に自信が持てなければ、何度でも下書きをしたほうがよい。

また、願書は受験校に入学希望の意思を伝える正式な書類。当然ながら虚偽の記載は許されない。小学校の出席日数や成績などの記入が必要な場合も、間違いのないよう正確に。

ただし、来春2020年入試では首都圏320校の私立中の約86%にあたる274校が「Web出願」できるようになっている。その場合は「手書きの間違い」ではなく「入力ミス」に気をつけたい。

②志望理由では入学への熱意を表現しよう

「志望理由」欄や「備考」欄は、その学校の教育方針への理解や賛同姿勢、あるいは入学への熱意を伝える貴重なスペース。面接のない学校では、とくに力を入れて記入したい。

③提出前には願書のコピーをとって保存

面接の際に、願書の記入事項を参考にしながら質問されるケースもある。したがって提出前にコピーをとっておき、面接前には、もう一度願書に記入した内容を確認しよう。入試当日に持参する受験票のチェックにも利用できる。

④「調査書」の依頼はまとめて冬休み前に

出願にあたって、小学校の「調査書」を必要とする学校はほとんどなくなっているが、まだ一部



入学願書の記入にあたっては「読みやすい字でていねいに書く」ことを心がけよう（写真は麻布中の入試風景）

の学校では、それが必要になる。

小学校の担任の先生への「調査書」記入の依頼は、「一括して」「早めに」頼むのが基本。そのためは、受験する可能性がある学校すべてについて、必要書類（願書一式）を早めに揃えておく必要がある。冬休みに入る前には、すべてまとめて記入をお願いできるようにしておこう。事前に保護者会や面談で担任の先生にお願いできる機会があれば、「後ほどよろしく願ひいたします」という旨をお伝えしておくとういだろう。

入試の後半で受ける併願校の分についても、後からお願ひしようと考えていると、いざとなったときに慌てて困ることがある。基本的には、受験する可能性があるすべての学校について、まとめて事前に記入を依頼すること。例外は、先生に「入試の期間にはいつでもすぐ書いてあげます」と指示された場合だけと考えておこう。

また、小学校の先生には、生徒の家庭から依頼されれば、調査書を記入してあげる義務があるとはいえ、その分の労力の負担をかけることは事実。あくまで謙虚に「お願ひする」という姿勢を忘れずに、ていねいに依頼することを心がけたい。

たがって、入試の期間中、一度や二度の不合格をもらったとしても、決して悲観することなどない。その悔しさをバネに、次の入試に向けてファイトを燃やして挑んでいけば必ず道は開けてくる。

そんな吹っ切れた気持ちで入試本番に挑むこと

ができれば、逆に結果として「実り多い合格」が必ずついてくる。

連日続く入試のなかで、日ごとにお子さんが精神的に成長し、最後には親から見ても驚くほど遅く、頼もしい結果を見せてくれたという例を、

2020年入試の併願でも上手に活用したい「ダブル出願&ダブル受験」

～あらゆる可能性を見越した「ダブル出願」のなかに、合格へのチャンスを見出そう！～

首都圏の中学入試では、新設校の誕生や入試回数の増加、午後入試の拡大などにより、年々、受験機会が増えてきた。そうした状況のもとで最良の併願作戦を組み立てていこうとすると、以下のような「ダブル出願」、「ダブル受験」が、それぞれの「第一志望校合格」のために果たす役割が大きくなってきた。

そこで、以下に典型的なパターンと、そこで注意しておくべきポイントを、あらためてご紹介しておこう。これらの方法を上手く生かして、合格のためのステップにしてほしいと思う。

①同日に2校出願しておき、それ以前の結果で受験校を決める「ダブル出願」

一般的に「ダブル出願」と呼ばれるのがこの形。たとえば東京、神奈川の入試スタート日である2月1日にAというチャレンジ校とBという実力相応校の2校に出願しておき、1月中の入試結果が良ければA校、悪ければB校を受験する。

同じパターンとして、2月2日や3日に「ダブル出願」をしておき、前日の結果（入試当日に合格発表される場合）しだいで翌日の受験校を決めるというケースも増えてきた。あとに述べる午後入試の可否によっても、翌日以降の受け方を二通り考えることができる。

さらにこの発展形として、2月2日、3日の当日発表の合否結果を見て、翌日以降の2月3日、4日、5日などの受験校を柔軟に選んでいくというパターンもある。

このパターンで要求されるのは、それ以前の結果がどうであろうとも、事前に決めた受け方で迷うことなく「受け続ける」姿勢。親子ともある程度の“覚悟”と、明るく気持ちを切り替える「心の準備」が必要になると考えておきたい。

また、この「ダブル出願」を検討する場合でも、



2019年入試では26000名以上の志願者が幕張メッセに集った1月の市川中（第1回）の入試風景

早くから親子でめざしてきた第1志望校については、むしろ「迷わずに（事前の入試結果がどうであろうとも）」チャレンジしていくほうが、結果が良い場合が多いということも意識しておきたい。

②同日の午前に1校受験し、午後にもう1校受験する「ダブル受験」

こちらは「ダブル出願」と区別して「ダブル受験」と呼ばれることが多い。午後入試の増加にともない、この7～8年の間に首都圏入試で急激に増えてきたパターンだ。体力と強い精神力が必要とされるが、上手くいくと早い段階で合格を得て、また後半戦で高い目標に挑むためのステップにすることができる。2月1日にこの「ダブル受験」をし、その結果しだいで、翌2日に、①のような「ダブル出願」をしておいた受験校をどちらかに決めるというパターンもある。

最近では2月1日だけでなく、2日、3日、4日以降や、埼玉エリアの入試がスタートする1月中（とくに1月10日と11日）にも午後入試の機会が増えていることに注目しておきたい。

ただし、この「ダブル受験」に挑むにあたっては、最悪の場合「1日のうちに2校とも不合格」というケースもあり得ることに要注意。覚悟を決めて強い気持ちで挑んでいく必要があると考えておくべきだろう。

私たちは現実に数多く見てきている。

たとえ途中までどのような結果であろうとも、最後までがんばって「受け抜いた」親子は、必ず満足な結果を手にすることができる。

そして春を迎える頃、中学受験に挑んだすべて

の受験生の家庭で「受験してよかったね」と、親子で受験までの思い出を振り返ることができれば、それに勝る喜びはない。そして、それぞれが進学した中高の6年間で、きっとこの先、お子さんも大きく成長していけるはずだ。